

造成ヨシ帯における漁場生産力の把握

磯田 能年

◆背景・目的

琵琶湖の周辺に存在するヨシ帯は、その多くが開発行為等により消失し魚類繁殖場としてあるべき場所が失われた。そこで、新たに造成されたヨシ群落の造成地区を対象に漁場としての生産能力を調査した。

◆成果の内容・特徴

- 高島市針江地先の造成ヨシ群落内において4月26日から6月27日までの間、週1回の頻度で計10回にわたり、塩ビパイプ枠（50cm×50cm）にキンランを取り付けた産卵基体を6箇所を設置し産卵状況を調査した。
- 産着卵は、4月26日から6月13日までの期間において確認され10回の調査中認められたのは8回であった。
- 今回得られた産着卵数から当該ヨシ群落造成場（3.8ha）の総産着卵数は約6.6億粒と推定した。
- 発生したニゴロブナ仔稚魚の冬期までの生残率を調査するため、ALC標識を施した全長20mm稚魚104,100尾をヨシ群落内に、12月には秋稚魚103,000尾を北湖へ分散して放流した。沖曳網漁業の捕獲魚より、冬期までの生残率は32.0%であった。

◆成果の活用・留意点

ヨシ群落の造成は、干拓や埋め立て等により減少した天然ヨシ群落の機能を補完するために奥行き深いヨシ帯をその沖合に新たに造成されたもので、天然ヨシ帯と一体となり魚類の産卵繁殖の場として機能を発揮し、琵琶湖の魚類資源の増殖に期待される。

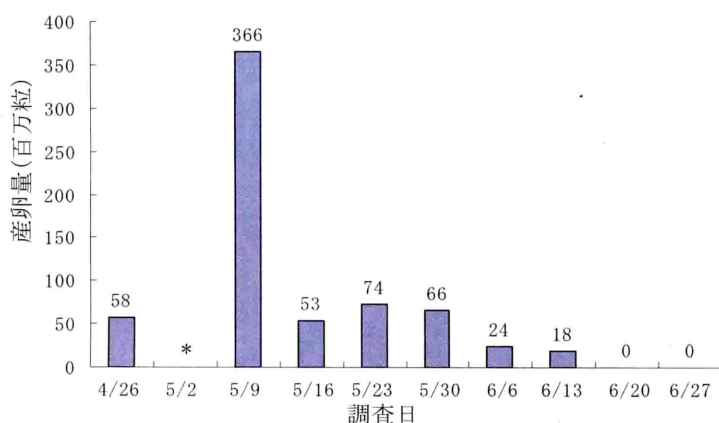


図1 ヨシ群落内におけるフナ類産着卵数の推移
*産卵は確認されたがキンランのみに集中して産卵していたため、産卵数の推定からは除外した。

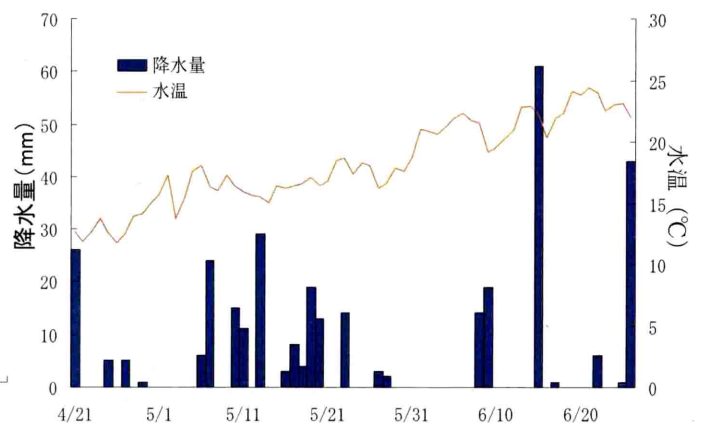


図2 調査期間中の降水量と水温